



秋田どじょうで 地域経済を活性化

秋田県信用組合



地域経済活性化のため、生産者とともに試行錯誤しながら、秋田どじょうの産地化とブランド化を目指す!

どじょう養殖で新しい産業の創出へ

近年、秋田県産どじょうの特産品化の動きが活発だ。その中心となっているのが、秋田県信用組合の呼びかけで発足した「秋田どじょう生産者協議会」。秋田のどじょう文化の復活と普及、そして県産どじょうのブランド化を目指し、秋田県信用組合は生産者とともに切磋琢磨している。

そもそもの始まりは、秋田県の人口減少、少子高齢化の現状に危機感を募らせていた信用組合が2010年、地元の12名の実業家を集めて立ち上げた「田舎ベンチャービジネスクラブ」だ。「森林や原野、休耕田など、秋田にもともとある地域資源を有効活用した新事業で、地域経済を活性化させる」という方向性のもと、同クラブからいくつもの事業が立ち上がった。その一つが、どじょうの養殖と特産品化である。

「田舎ベンチャービジネスクラブ」発足当初から「どじょう養殖」の構想があったという北林理事長。しかし、いざ養殖に乗り出そうとする会員は見当たらない。そんなとき、信用組合田代支店に相談に来ていたのが、現在、マツタ食産の代表を務める松田正男さんだ。退職後、大館産のどじょうを復活させたい一心で、どじょうの養殖を始めようとしていた松田さん。北林理事長が声をかけ、同クラブの事業として、念願のどじょう養殖を始めることになった。その後、県内各地の養殖業者が集まり、「秋田どじょう生産者協議会」が発足した。



A マツタ食産代表松田正男さん(大館市田代地区の養殖場にて)
B 大きさの違うどじょうを仕分ける「選別機」

生産者に寄り添い事業を軌道に乗せる

マツタ食産を始め、協議会に参加している生産者の多くはどじょう養殖の経験がない、新規で参入してきた事業者だ。養殖沼の水質や環境、襲い来る虫や鳥への対策、成育に合わせた餌の選別や配合など、毎日が課題の連続だった。それに対し、信用組合の職員は養殖沼に足繁く通い、組織力と人脈を生かしてアドバイスを授けてくれる人物を日本中から探し、自分たちでも知恵をしばりながら、生産者とともに試行錯誤してきた。今後は、冬場に出荷できないどじょうを通年で出荷すること、自分たちの養殖場内で稚魚を孵化させることなどが目標だ。

また、協議会では、商標登録を行った「秋田どじょう」をより付加価値のあるブランドにするため、「地下水、伏流水を使用する」「餌に抗生物質は使用しない」などの基準を設け、品質の向上と安定化に努めている。その品質の高さが認められ、2015年からは東京浅草の老舗どじょう料理店「どぜう飯田屋」にて、どじょう好きの舌を喜ばせている。

養殖事業の立ち上げから寄り添い、品質の向上・ブランド化、販路の確保など、信用組合の地域事業支援は金融サービスにとどまらない。新たな産業を創出する、秋田県信用組合の積極的な地域支援の今後の展開に期待が高まる。



理事長
北林 貞男
Sadao Kitabayashi

秋田県信用組合

〒010-0011 秋田県秋田市南通亀の町4番5号
TEL.018-831-3551
FAX.018-833-2400
URL <http://www.akita-kenshin.jp>

【会社概要】

秋田県唯一の地域信用組合。地域密着型の金融機関として、地域活性化、中小企業金融の円滑化を目指す。「地方創生への取組」として、地域資源や地域の伝統技術を掘り起こし、地域経済の活性化を促す取組みも展開している。
創設年:1948年

